

BC CLINIC BREAST CANCER うえお乳腺外科

乳癌患者さんが受け継いできた患者さん同士が支え合う伝統

開院10周年を迎えたうえお乳腺外科。当クリニックには、患者さん同士が励まし合い、助け合う伝統があるという。「患者さん同士のサポートに私達も元気づけられています」と話す上尾裕昭院長に、乳癌治療を支えるスタッフの取り組み、患者さんの雰囲気、工夫を凝らした治療環境について教えていただいた。



院長
上尾裕昭 先生

>>>> 乳癌患者さんに居心地の良い、優しいクリニックを

うえお乳腺外科は、大分県で初めての乳腺専門施設として2002年10月に開院。2011年の年間手術数は265例。大分県全体の乳癌手術の約4割を占めている。

「乳癌患者さんにとって居心地の良い優しい施設にすることが念願ですが、スタッフは勿論、患者さん同士が優しい雰囲気を生み出してくれています。そのポイントを3つ挙げるとしたら、スタッフ、患者さん、治療環境でしょうか」と上尾先生は話す。

>>>> スタッフはテーマを持って

スタッフは3名の男性医師（上尾裕昭先生、渋田健二先生、甲斐裕一郎先生）以外は全員が女性で、2名の女性医師（久保田陽子先生、福永真理先生）をはじめ看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、栄養士、事務部など総勢40名以上がチーム医療を展開している。

「チーム医療の第一歩は情報の共有から」をモットーに、医師は昼食を一緒に摂るようにしてコミュニケーションの時間を作っている。また、朝の当直ナースの申し送りには看護師だけでなく、医師、薬剤師、栄養士、ケアスタッフも参加して、入院患者さんの前夜の情報を把握してから回診がスタートする。

さらにスタッフ全員が研究テーマを持っているという。「目の前の患者さんに役立つようなテーマを選んでいきます」と上尾先生。例えば、立川裕子看護師長のテーマは「病名告知直後の病棟案内による不安軽減」。外来で乳癌の告知を受けた患者さんはショックを受けて頭が真っ白になることが少なくない。そこで、当クリニックでは不安を和らげる目的で、告知直後に看護師長が病棟を案内するようにしている。病室に案内すると先輩患者さんたちが「私も不安だったけど、手術後はこんなに元気だから大丈夫ですよ」と励ましてくれるという。このような告知直後の病棟案内を受けた患者さんのアンケートを行ったところ、「元気な先輩患者さんたちに触れ、励まされるうちに気持ちが落ち着いてきた」と患者さんたちに好評とのこと。

その他にも、「万歩計の貸し出しによる入院中の足腰保持」（看護部）、「眉毛や睫毛の脱毛調査とビューティ・ケア」（看護部と地元的美容院との連携）、大分大学の脱毛予防ローション開発への協力（薬剤師）、化学療法時の食事の工夫（栄養士）など、各スタッフがさまざまな研究に取り組んでいて、その成果は地域の研究会で積極的に発表しているようだ。

一方、上尾院長は形成外科医との連携による乳房再建¹⁾、渋田副院長は南九州4施設の共同研究²⁾、甲斐病棟医長は抗がん剤の効果予測のための遺伝子解析³⁾（九州大学別府病院との共同研究）などに取り組んでいる。

名称	うえお乳腺外科
住所	〒870-0854 大分県大分市羽屋188-2
電話	097 (514) 0025
開設	2002年
スタッフ	乳腺外科医 (5) 看護師 (23) 診療放射線技師 (2) 臨床検査技師 (2) ケアスタッフ (8) 事務部 (8)
ベッド数	19床
年間乳癌手術件数	265件 (2011年)



看護部の朝の申し送りには、医師、薬剤師、栄養士も参加する。



解放感あふれる談話室。患者さん同士が交流する大切な場所になっている。



患者さんから贈られた絵や写真などが飾られた「なでしこギャラリー」。

し、励まされる、かけがえのない仲間なのだろう。「患者さんの最大のサポーターは患者さん仲間です」と語る上尾先生の言葉が印象的だった。

>>>> 患者さんが患者さんを励ます“伝統”

「乳癌患者さん同士の“絆”が強いことは、開業前の私の予想と期待を遥かに上回っていました」と上尾先生。絆を象徴するのは、手術室に向かう患者さんを他の患者さん達が見送るという伝統だ。開院2ヶ月目に自然発生的に始まったと言う。「当時、手術室に入って来る患者さんが涙ぐんでいることが続き、入室直前の私の説明が悪かったのかと心配したのですが、実は他の患者さんの見送りに感激して涙ぐんでいたということが判りました」と上尾先生は微笑む。

その後、患者さんから「手術室入室の合図を」という要請があり、「上を向いて歩こう」のピアノ曲を全館に流すようにしたとのこと。このメロディが院内に流れると、手術室へ向かうエレベーター前に入院患者さんが並んで「頑張ってるね」と口々に声をかけて見送る。これまで約2,000人の乳癌手術患者さんが綿々と受け継いできた伝統……上尾先生は「このシーンを目にする度に、私たちもファイトが湧いて来ます」と言う。

そして患者さん同士の励ましは入院中だけに留まらず、退院後もボランティアとしての訪問があると言う。定期的なフラワーデザイン教室、わんわんタイム（子犬を連れた訪問）、ギターコンサートなどが入院患者さんの心を癒してくれている。患者さん同士は励まし、

>>>> 治療環境にも心を配り、敷地内に温泉も

「新築する時に患者さん達の意見をお聞きしたところ、“病院らしくない施設を”というご希望が最も多かったんです」と語る上尾先生は、随所に工夫を凝らしている。シックな色調の外壁と玄関、木製の格子戸、和風の談話室、花や人形が並ぶ空間、患者さんから贈られた絵や写真の展示などが、アットホームな雰囲気を出している。

談話室では自由にコーヒーを淹れることができ、隣のリハビリ室にはランニングマシン、エアロバイク、滑車などが並び、このゾーンは入院患者さんたちの憩いの場所となっている。

そして、ここは湯の国・大分。なんと敷地内には天然温泉が掘られている。「入院患者さんを温泉に……。一人になれる時間も必要」との配慮で、温泉は一人30分の貸し切り制。術後3日目から利用できる。



敷地内の天然温泉。「秘湯 なでしこ温泉」と名付けられた。

>>>> ひとり一人の患者さんにこだわって

開業1年目は年間100例だった乳癌手術も、現在では年間250件を超えるまでになっている。年々忙しくなる中でも、“チーム・うえお”は常に一人ひとりの患者さんに気を配る。外来での乳癌告知の際には患者さんに「入院中に気になることは何ですか?」と尋ね、「子供、仕事、夫、親、ペット」の順にカルテに記載。この情報をスタッフと共有して、その後のケアの参考にするという。

「ひとり一人の患者さんにこだわった優しいケア……という初心を忘れないようにしたい」と先生は笑顔で語った。



1) 上尾裕昭、渋谷健二、早川宏司 Nipple Sparing Mastectomy (NSM)、外科医が修得すべき乳癌手術、124-136、MEDICAL WIEW、2011。

2) Shibuta K, Ueo H et al. The relevance of intrinsic subtype to clinicopathological features and prognosis in 4,266 Japanese women with breast cancer. Breast Cancer, 18: 292-298,2011

3) 甲斐裕一郎ほか: 乳癌におけるアンシラサイクリン系抗癌剤の効果予測因子としてのLPTM4BとYWHAZの蛋白発現の解析. 第111回日本外科学会定期学術集会. PS-149